

有機栽培はちみつ共同開発

EPAで輸入増期待

5年後に100トン体制目標

医薬品メーカーの興和（本社名古屋、三輪芳弘社長）と養蜂問屋ではちみつメーカーの秋田屋本店（本社岐阜、中村正社長）は、南米・チリでオーガニック（有機栽培）はちみつを共同開発を本格化する。国内で流通する中国産はちみつが自国需要の増加に伴い輸出態勢を整えたい考



チリの養蜂風景

全・安心な
はちみつを
確保する狙
いもある。
現時点
で、チリ産
の価格は中
国産に比べ
2・5倍と
割高。しか
し、将来を
見据え、中

えだ。

2社はチリの首都サンティアゴから700キロ南のチロエ島で、ウルモ樹を中心とする自然林から採れるはちみつと、同島周辺の樹木「キフヤ」の花から採れるはちみつを生産する現地養蜂農家に委託、2009年2月から国内輸入に乗り出している。

興和は日本とチリがEPA（経済連携協定）を結んだことで、現在はちみつに25・5%かけられている関税が撤廃される見通しに期待。将来、国産はちみつに比べ低価格で、高品質のチリ産はちみつが競争力が高まるとみて、輸入業者として携わる。

一方、秋田屋本店はスイスに本部を置く国際的なオーガニック製品の認証機関「IMO」の認定を受けたチリ産はちみつを旗印に、食品や化粧品分野に活用。関連商品をインターネットや通販で扱い収益拡大を狙う考えだ。

国産に代わる良質なはちみつと位置づける。アンデス山脈を擁するなど自然豊かな土地が育むはちみつの開発と調達を急ぐ。
(岐阜・中山陽子)